

〔論文〕

幼児期の音楽指導に関する一考察

深 田 直 子
Naoko Fukada

大阪総合保育大学
児童保育学部

教育において、個々の個性や能力が十分に伸ばされ、望ましい社会人としての育成がなされなければならない。それには、子どもの身体的・精神的発達の段階が正しくとらえられ、その段階をふまえた上で指導がおこなわれる必要がある。本稿では、子どもの音楽的成長のためのピアノ導入指導法について、半年間の3名の幼稚園児への筆者の実践を報告し、学習形態（個人、グループ）と子どもたちが自発的に音楽を楽しみ、喜びを感じることができるような環境と子どもに対する援助について、歌う活動、リズム活動、聴く活動、弾く活動、創る活動から考察した。

キーワード：ピアノ指導、幼児、音楽活動、導入

I はじめに

J. L. マーセル（以下、マーセルと略名する）は『音楽的成長のための教育』の中で、「音楽的成長は、歌うこと、弾くこと、音楽の鑑賞、理論、技術の練習などを通して、音楽的反応の発達を促そうとする」¹⁾と述べている。これは、音楽教育の核心と言えよう。またマーセルは、「発達の学習は、表面的な個々の現象より、内面的な生命のある実体に重きを置き、それを学習者によって把握させ、その把握したものを外へ表すことによって、さらにその把握力を発達させようとする学習である」²⁾と述べている。

では、音楽の実態とは何であろうか。それは「音とリズムからなるパターンである」³⁾とマーセルは述べている。つまり、音とリズムの形、質、色彩、配置、パターン、ニュアンスなどにより、音楽が具現化され、音楽が生まれるのである。

さて、音楽的発達を促すためには、どのような方法が考えられるだろうか。それは、「音楽自体に対して反応させる力を発達させる指導が必要である」⁴⁾とマーセルは述べている。さらにマーセルは成長について「音楽的成長とは、音楽に対して反応する力の発達－音とリズムのパターンを知覚し、想像し、考える力と、それによってあらわされる感情内容に対する感受性の発達のことである」⁵⁾と述べている。豊かな感受性の育成は、

音楽教育全般にわたり重要な点であると言える。この感受性が欠けてしまうと、演奏技術の指導が中心となり、さらには技術偏重になると、指先がどれだけ動いても、音自体は機械的になってしまう。音楽を正しく聴ける音楽感性が発達しているなら、つまり音楽そのものに対して反応する力があれば、必ず表面に現れてくるだろう。例えば、ピアノの鍵盤に触れた時、ただ音を鳴らすのではなく、音楽的な音を出すように心掛け、音楽的な音を出すことができるだろう。

「音楽性を発達させるには、学習者が音楽そのものに（外面的な記号や規則、手の動かし方などではなく）、感情、知性、想像力を通して反応するように指導すればいいのである」⁶⁾とマーセルは述べている。また、マーセルは「音楽的発達と音楽についての知覚、想像力、思考力、感受性の発達を、学習全体のハイライトとする教育である」⁷⁾と述べている。

これらのことから、導入期のピアノ指導においては、ピアノ指導というよりは、むしろそれを中心にした音楽活動を通しておこなうことが考えられる。これは、単なる思い付きや好みでおこなうものではなく、目的性のある、かつ意図的に配慮された環境、そして指導者からの援助のもとで活動がおこなわれるのが望ましいと考える。

本研究の目的は、前述したマーセルの論述から、導入期のピアノ指導において、子どもにどのような環境を与え、援助ができるのか、そして音楽的感性の発達を目指したピアノ指導について考えていきたい。

子どもの成長や発達がどのようにおこなわれているのか、またその発達過程がピアノ学習とどのように結びつ

大阪総合保育大学

〒546-0013 大阪府大阪市東住吉区湯里6丁目4-26

n-fukada@jonan.ac.jp

いていくのか、実際に幼児の音楽的能力が半年間のピアノ指導を中心とした音楽活動を通して、変化あるいは発達が見られるかを明らかにする。具体的には3人の幼児を対象とし、音楽活動の経過を記録し、事例を通して、音楽的能力がどのように発達していくかを考察する。

II 方法

1. 調査期間、対象と手続

期間：××年6月～××12月

対象と手続：A市A幼稚園に通う園児3人を対象に、週1回14:30から約1時間30分音楽活動をおこなった。音楽活動形態は基本的にグループでおこなうが、その時間内で個々の活動も含める。なお、この指導は2人の指導者が交互に担当し、1人は指導、1人は補助および記録をおこなった。

2. 音楽活動内容

(1) 音域調査（歌う活動）

ピアノの音を聞いて、ピアノの音に合わせてCCC、CDC、CDEなど安定した音程で歌えるかを調べた。初めから階名で歌うのは難しいので、歌の歌詞やことばに置き換えて歌うようにし、慣れてきたら階名読みに移行した。これは調査の最初に毎回おこなった。声が出る最高音、最低音を調べる場合、ピアノで半音ずつずらせて念入りにおこない、細かく記録する。調査の際、半音よりも少し高い場合は「C⁺」、少し低い場合は「C⁻」のように、半音1/2まで記録した。

(2) リズム（リズム活動）

リズムの記憶およびリズム打ちを手でおこなった。指導者がリズムを変えた時に、同じように変えられるか、または指導者と同じリズム打ちがすぐに変え対応できるかを見た（同期）。また、指導者のピアノで弾く曲に合わせて好きな打楽器を使ってリズム打ちをした。ピアノ曲は、リズム打ちをおこなうのに合わせやすいリズムのはっきりした曲を聴かせ、曲とリズム打ちが合っていることを感じさせた。

(3) ピアノ（弾く活動）

ピアノに慣れ、触れ、親しむことから始めた。指導者がピアノを弾いて聴かせたりもした。子どもたちが自然に楽しく音楽活動ができるように、雰囲気作りも大切である。まず黒鍵と白鍵の区別から入った。黒鍵の2つと3つの固まりが見て理解できているかを見た。椅子に座って場所を固定させるのではなく、立ったまま鍵盤の

端から端までを使い、鍵盤の並び方を理解させた。幼児はドレミ……の階名読みはできる場合がほとんどであるので、全ての音が複数あることを鍵盤全体を使って説明した。鍵盤に慣れてきたら、自由に音を鳴らしているところから、「ピアノを弾く」ことを指導する。手を軽く丸めて、少し高い位置から手を落としてみた。この時に無理のない力で落とす、脱力を体感させる。そこから、1音のみ親指から弾くことを始めた。

(4) 鑑賞（聴く活動）

使用した曲は、シューマン作曲「楽しき農夫」、「兵士の行進」、「子どもの情景」より「トロイメライ」、マクドウェル作曲「野ばらに寄せて」、ゴセック作曲「ガボット」、オースティン作曲「人形の夢と目覚め」、バーンズ作曲「森の花」、ストーリーボック作曲「みんなであのしく」、ブルグミュラー作曲「乗馬」「せきれい」、ドビュッシー作曲（「子どもの領分」より）「ゴリウオークのケークウォーク」、ブラームス作曲「子守歌」、ヨハン・シュトラウス作曲「美しき青きドナウ」、カバレフスキー作曲「小さな歌」、ワルトトイフェン作曲「スケーター・ワルツ」、モーツァルト作曲「トルコ行進曲」などを使用した。以上の曲は、子どもが集中できるように、曲を短くして聴かせた。音楽を聴くことで、何かを感じる心の状態を探る目的でおこなった。これらの曲を、毎回静かな曲・活発な曲と対照的な2曲を聴かせて、どちらの曲を好むかと尋ねたり、以前に聴いた曲をどの程度覚えているかなどを想起させたり、さらには子どものその日の心情や態度も観察した。

(5) ソルフージュ

音域調査から続くものであり、読譜ができるようになってから始める。音符を指さしながら歌うように指導した。

(6) その他（創作活動）

- 1) 音楽に合わせて体を動かす。リズムに合わせて歩いたり、スキップをしたり、または動物の模倣で歩いたりした。
- 2) 打楽器を使って、どのような音が鳴るか、演奏方法を変えて違う音が鳴るかなど、創作させた。
- 3) 「まる」を描く。初めは自由に描いているが、まるが一定の大きさで連なった書き方ができるようにし、慣れてきたらこれが音符の形だと理解できるように指導した。

3. 倫理的配慮

本研究の実施にあたって、実践した幼稚園園長と、対象の3名の保護者に研究について説明し、参加への了解を口頭で得た。

Ⅲ 結果

記録から3人の園児の特に発達が見られた活動について、園児ごとに以下に述べる。

1. S児（活動開始時4歳6ヶ月）の音楽活動

（1）音域調査（歌う活動）

S児はかなり音域幅が狭く、活動を始めた当初はc、d'の2音のみ安定していた（図1 譜例1）。なかなか音域幅が広がらず、どのようにすれば広がるのかを探りながら指導した。出す声がピアノの音に合わせることができないので、声を出さずにピアノの音を聴かせたり、S児と一緒に声を出したりした。手を上下にして、視覚とともに発声することも試みた。活動を続けていくうちに発声が安定し、声域幅が広がり、半年後にはaからg'まで確実に声が出るようになった（図2 譜例2）。

また、ソルフェージュ教材を使用し音域調査を進めていたが、特に進歩が見られたのは読譜に関してであった。手を上下して発声していたことと、楽譜の高低が合致して理解できたのだと思われる。



図1 譜例1

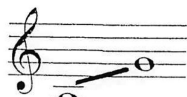


図2 譜例2

（2）ピアノ（弾く活動）

最初にピアノのcの鍵盤の位置（中心のc'）を指導するが、なかなか理解できなかった。これはc'の鍵盤の形を覚えたことで、中心以外、他のcを指すようになった。しかし、音域調査での読譜の理解とともに楽譜を見ながら、さらに歌いながら弾くことができるようになった。

2. K児（活動開始時5歳1ヶ月）の音楽活動

（1）ピアノ（弾く活動）

活動が始まった当初は、手を丸く整え、少し高い位置からピアノの鍵盤の上に手を落とさせてみた。始めは緊張もあり手に無理な力が入り、鍵盤の上に手を楽な格好で落とすことができなかったが、回を重ねるごとに少しずつ習得していき、脱力ができるようになった。K児の場合、聴いて覚えることが多く、読譜はかなり進度が遅

かった。音域調査やリズム活動で使用していた楽譜を使用して、楽譜を見ながら発声したり試してみたが、楽譜の上下（高低）が調査期間内では理解できなかったと思われる。子どもの成長は著しく、K児は手の大きさがかなり成長していた。骨格がしっかりしてきて、ピアノを弾くのに安定したアーチがつくることができていた。

（2）鑑賞（聴く活動）

シューマン作曲「楽しき農夫」を聴いて「楽しかった。」に加えて「変身できそうな曲だった。」と答えた。途中で曲想が変わるところで、変身できそうだとイメージしたようである。また、シューマン作曲「兵士の行進」を聴いて、「怪獣がどんどん近づいてきて食べられそうだった。だからこの曲は好きじゃない。」と答えた。この曲の行進する軽快なリズムが「怪獣がドストドと歩く音に聞こえた。」と答えた。その他、ブルグミュラー作曲「貴婦人の乗馬」を聴いていて、途中で曲想が変わった時に「雷みたい。」と表現した。特にこの園児は、さまざまな曲を聴いている時、何か身体の動きがあった。活発な曲を聴く時は曲に合わせて手拍子やひざをたたいてリズム打ちをしたり、その場で足踏みをしたこともあった。静かな曲を聴く時は、じっと耳を澄ましているような格好をして聴いたり、眠ったふりをしていた。表現力が豊かであった。

（3）創作活動

工作が好きなK児は、ヨーグルトの空きカップ2つに植物の種を何粒か入れて、シェイカーのようなものを作ってきた。また、紙コップ製のシェイカーと空き缶製のシェイカーの中にも植物の種を入れ「音が違う。」と言い「空き缶の方がカラカラきれいな音がする。」と答えた。他にも空き缶と風船で小さなたいこを作った。シェイカーの時のように比べるため、風船の張り具合が違うものを作って音を鳴らし聴かせた。「ピンと張った方が、パンパン高い音が出る。」と答えた。

3. A児（活動開始時5歳6ヶ月）の音楽活動

（1）リズム（リズム活動）

活動を始めた当初は、シューマン作曲「楽しき農夫」の曲に合わせて手でリズム打ちをした。この曲は4分の4拍子であり、8分音符での動きが多いが、曲に合わせて譜例3（図3）のように曲想に合ったリズム打ちをおこなっていた。オースティン作曲「人形の夢と目覚め」の第3楽章を聴いてリズム打ちをおこなった。譜例4（図4）のリズム形態が連続しているのだが、A児は譜例5（図5）のリズム打ちをし、曲に合ったリズムを考

案することができた。回数を重ねるにつれ、譜例4のリズム打ちもできるようになった。譜例4と譜例5のリズムの使い分けは、その時の曲の速度によって自分なりにイメージしていたようである。また手拍子とともに休符も習得することができていた。



図3 譜例3



図4 譜例4



図5 譜例5

ブルグミュラー作曲「貴婦人の乗馬」を聴いて、譜例6（図6）のようなリズム打ちをおこなっていた。



図6 譜例6

またリズムの模倣・記憶ができるかをみた。付点リズム（譜例7、図7）が正確に打つことができず、譜例8（図8）のようになっていたが、回を重ねるうちに、安定したリズム打ちができるようになった。記憶に関しては、2小節までのものであれば正確にリズム打ちができるようになった。



図7 譜例7



図8 譜例8

（2）鑑賞（聴く活動）

マクドウエル作曲「野ばらに寄せて」とシューマン作曲「楽しき農夫」を聴かせた。この2曲は比較させるために、曲想の違うものを選曲した。どちらが好きかな？と聞くと、「楽しき農夫」の方が好きだと答えた。各曲のイメージを聞くと「楽しき農夫」は楽しい感じ、「野ばらに寄せて」はきれいな感じと答えた。さらに「野ば

らに寄せて」は「花びらがひらひら落ちていく感じ」とも表現した。A児は特に鑑賞（聴く活動）が好きであり、曲の感想に併せて詳しく曲のイメージを話していた。

Ⅳ 考察

幼児のピアノを中心とした音楽活動をおこない、そこから音楽的能力の変化、あるいは発達が見られるかどうかを検討した。

通常ピアノ指導の際、伝統的に1対1の個人レッスンという形がほとんどである。しかし、今回の音楽活動の活動形態は、ピアノに関しては個人の活動であったが、その他の活動は基本的にはグループでおこなった。これは幼児にはどのような効果があるのか、どのような効果が得られたのかを考察する。また、今回の調査結果から、幼児の音楽的能力の発達についても考察をおこなう。

1. 学習形態に関して

ピアノ指導は、伝統的に指導者と生徒1人による個人レッスンの形が中心でおこなわれることが多い。現在でも個人レッスンの方がはるかに広くおこなわれている。個人レッスン形態では、①生徒の能力、進度によって、学習計画を組むことができる。②苦手な部分の矯正に、多くの時間をかけることができる。③生徒の演奏に対する評価がすぐに生徒に直接与えることができる。などの利点がある⁸⁾。個々の生徒の音楽性を見極めができ、個人レッスンの形が多く取り入れられた。一方、グループレッスンは、指導効果の増大、指導効率の向上を目指して、レッスンの集団化の試行がおこなわれてきた⁹⁾。グループレッスンのもつ利点がある仲間同士の刺激を与え、そこから能力を高めていくことができる。また、数人の生徒に同じ課題を与え、グループで考えながら活動することができる。

個人レッスンでは、技術習得のためにきめ細やかな行き届いた指導をおこなうことができる。しかし、内容が演奏のことに偏りがちで、指の試練と読譜の訓練のみになってしまうことも少なくないと思われる。子どもにとっては、レッスンの目的が理解できないまま、ややもすればレッスンに対する興味を失うことにも成りかねない。ピアノを学習する子どもにとっては、ピアノの学習とは、指の訓練だけではなく、聴音力や歌唱力、メロディー感など、音楽を楽しみ、将来音楽活動の基礎となるものを作っていくことであると考えている。子どもは家族や友達との遊びの中からさまざまな事柄を体感してい

く。つまり、個人1人にはない仲間とともに楽しむ＝グループを通して音楽を身に付けていくのである。グループレッスンは、子どもたちに無理なく音楽に導くことができるレッスン形態であると考えられる。例えば、楽器を演奏するのに、個人ではなく、グループであれば合奏が可能となる。

今回の音楽活動の中で、3人の幼児が打楽器を使って、曲に合わせてリズム打ちをおこなった。みんなが楽しんで活動し、また3人それぞれが違う打ち方をしている幼児のことを他の幼児たちが模倣したり、3人が揃うように個々が合わせようとしたり、という幼児の工夫が見られた。このように、グループレッスンでは個性の違いや独創性が楽しさや豊かさを生むのである。生徒は、それぞれの個性を尊重し合い、創造的な人間として彼ら自身の可能性をさらに理解するのである。

グループレッスンでは、上記のような利点がある反面、個々の能力の把握が個人レッスンに比べて把握しにくいという面があるのは当然のことであろう。また、限られた時間内で多人数の生徒を教えるため、生徒個々の自発性を引き出しにくく、さらには総体的な音楽経験の量が不足する傾向があることも考えられる。指導者には常に一人ひとりの能力を把握し、なるべくグループの能力差を少なくすることが大切である。この能力差をグループレッスンに有効に活用すること、また能力差を少なくするような配慮も考えなければならない。また、数人が一緒に活動をおこなうため、互いに競争することも考えられる。しかし、子どもに競争で弾かせたりしてはいけな。むしろ積極的かつ前向きに、子どもの音楽的成長や仲間を思いやり助ける喜び、協調の精神を伸ばすよう努めることが大切であると考えられる。そして、このことが子どもに、互いに何をおこなっているのか競い合って確認し合うような親しい「Give and take」の心を持たせることができたとしたならば、目に見える成果であろう。

筆者の主たる指導は、個人のピアノ指導、個人レッスンであるが、今回の調査において個人レッスンだけではなく、グループ活動の指導も加えておこなった。確かに個人レッスンでは、個々の能力を早く把握でき、個人にかけることができる時間が多いため、子どもが苦手とするところにも時間をかけることが可能になる。しかし、子どもは先に述べたように、家族や友達との遊びの中から体得していくため、個人より仲間とともに学習することにより、大きな効果を得ることができるだろう。グループであれば、楽器を使用せず手拍子であったとしても、合奏が可能となる。また、アンサンブルも可能である。アンサンブルは個々の技術的な負担を軽くすること

により、完成度をもった音楽体験をさせることを目的としている。これは個人レッスンでは体験のできないことであろう。

指導するにあたり、幼児にピアノへの興味を持たせ、積極的にレッスンに参加させることができるような雰囲気作りが大切である。また、指導者は学習の目的を明確にし、個人の能力の把握をし、能力差をできるだけ作らないようにすることが、効果的なグループレッスンの進め方であると考えられる。

また、個人レッスンとグループレッスンのどちらの方が良い方法なのか、ということではなく、いかに有効に時間を使うべきか、子どもの成長に沿った指導方法をよく考えなければならない。指導する際、子どもが長く音楽に興味を持つことができるような幅広い要素を与えていくような努力が必要である。

2. ピアノ導入における指導方法に関して

音楽的能力の発達について事例的に考察してきたが、ここでは、これまで見てきた子どもの活動状況をもとにして、音楽的感性の発達を目指して、どのような指導が考えられるか検討する。

幼児期は遊ぶことと学習することとの区別がまだできない、未分化の時期である。したがって、幼児の音楽教育は音楽を遊びとの関わりから捉えて、場合によっては未分化のものとして養い伸ばされることが適切な場合もある。このような観点から、幼児の音楽活動において、未分化なもの、そのものとして捉えながら指導し、音楽的能力を伸ばしていくことが必要であろう。そして、幼児の成長や発達面から、テクニック指導に偏らず、子どもたちが自発的に音楽を楽しみ、喜びを感じることができるよう環境を与え、子どもに対して援助するのが望ましいだろう。このような基本事項から、音楽活動の指導方法を考察してみる。また、ピアノ教則本に関する考察も含めたピアノ指導についても考察する。

(1) 歌う活動

幼児の声域は、ジャーシルトとビーンストックの研究(1934)(斉藤, 1997)¹⁰⁾によると、3歳ごろの音域は6度(c'～a')であるが、5歳で11度(a～d')、6歳ごろでは14度(a～g')という報告がある。ここから、5歳から6歳の間の声域の拡大は著しく、音域の広がりとともに旋律を歌えるようになっていくことが分かる。このように、幼児の声域のことを十分に考慮した上で教材選択をすることが大切である。そして声域に合った歌の中で正確に歌うことも大切である。

コダーイ・ゾルターン(Kodaly Zoltan)によれば、

「音楽の真髄に近づく最もよい手段は、誰もが持っている楽器、喉を使うことである。歌うことは誰でもできるということだ」¹¹⁾ という。ここから、指導者が自然で、かつ実際に生の声で歌い、子どもがそれを聴いて自発的に歌うように促さなければならないと考える。

このような留意はもちろんであるが、歌う活動に関して重要なことは、子どもがその歌う活動の中で楽しみ、どのような表現をしているかということである。歌うことは、言葉をメロディーにのせて人間の心を表現する。また、教材（歌詞）の内容が幼児にとって身近なものの方が親しみやすく、楽しんで歌うだろう。「ぞうさん」「チューリップ」「森のくまさん」「手をたたきましょう」「ドレミの歌」「ちょうちょう」「大きな栗の木の下で」「山の音楽家」など身体表現のできる歌、幼児の身近にある具体物を題材にした歌が多いことが分かる。また、歌詞の中に出てくる言葉は、子どものリズム感の発達に大きな役割を果たす。特に、「さらさら」や「ゴロゴロ」などといった擬音が豊富に用いられていることが多い。このように子どもに親しみやすい曲を楽しく歌わせると同時に、先に挙げた声域のことも十分配慮しなければならない。

歌うことは、それを覚えること－記憶－が問題となるだろう。子どもが歌を覚えることは、大まかに捉えながら覚えていくので、成人のように一節ずつまたは部分的に取り出して覚えるような方法ではない。山下俊郎は「幼児心理学」の中で幼児の全体的記憶について、幼児は「人が歌うのや、ラジオやレコード」^{注1}を聞いていて、それを一つの全体として耳に入れていくうちに覚えるのである。何回となく聞いているうちに全体を覚えてしまうのである。だからその一部分をとらえて「このところをどう歌うの？」と聞いても、その部分だけ取り出して歌うことはできない。幼児はその歌が全体として頭に入っているの、もう一度始めから歌ってこないとよく分からない。一部分は全体の中の一部分であって、一部分だけを切り離すことはできないのである」¹²⁾と述べている。このことから、歌う技能の個々の分化というよりも、むしろ全体的記憶として指導を進めていく方が幼児には適切であろう。

また、上記に挙げた曲、歌う活動において使用した曲は西洋音楽であるが、日本のわらべうたについてはどうだろうか。わらべうたは、日本人の感性から生まれ、日本人の生活に古くから根付いてきたものである。よって、日本の言葉やイントネーションに合ったリズム、旋律になっており、日本語のもつ独特な音の高低の、自然なりゆきによって生まれ出てきたものである。そして、子ども自身の言葉の発達として既に内包してきた要

素そのままが、わらべうたである。このように、子どもの歌う活動の中で、わらべうたを多く取り入れる必要があると考える。コダーイ・ゾルターンは「歌と動きは、誰もが知っているわらべうた遊びを実際におこなわれる中で結合されるべきである。」¹¹⁾と述べている。これはコダーイの教育思想の中でも重要なものであると考える。しかし、現実には子どもの生活の中で、わらべうたよりも他の要素を持つ歌や音楽に触れる場合の方が量的・時間的に多く、また子どもの好み歌は、わらべうたよりも西洋音楽の方が親しみやすく、子どもの生活の中にわらべうたは根付いていない。むしろ、西洋音楽の方がよく取り入れられているだろう。今回の調査に於いて歌う活動を実施したが、その際に使用した教材は、ピアノ指導の時に使用したJ. Bastien & J. S. Bastienによる『The Bastien Piano Library = Primer Level』¹³⁾から選曲した。日本の教材ではなく、この西洋音楽の教材を使用したのは、子どもがこれらのメロディーに慣れ親しみ、歌うのに適切な声域だからである。しかし、我が国では幼児に適した、かつ彼らが自然な声で口ずさむことができる、特に日本語に合うリズムを活かした音楽的な歌、例えばわらべうたや民謡が教則本の中により多く取り入れられるとよいのではないだろうか。わらべうたを指導の中に多く取り入れることについては、今後の課題であると考ええる。

（２）リズム活動

「はじめにリズムありき」ということばの示すように、人間は人間として否、生物的に見ても、リズム的存在なのである。音楽のもとにはリズムと言っても過言ではないだろう。子どもは生まれてから後、生活の中でリズムカルな表現をし続ける。そして、リズム遊びやリズムに合わせて体を動かすことは、その楽しさに加えて、心が躍動し、精神的にも充実したものになる。また、よりリズムカルな音楽ほど、子どもは喜び、子どもにとって魅力的であるとも言える。特に、幼児期の音楽活動の中でリズム活動が強調されていることは、リズム活動が導入期の音楽活動の中で重要な位置を占め、かつ発達の段階において自然なことである。

「音楽を正確に感じるの、身体で正確に感じることによってである」¹⁴⁾とは、全身を動かして音に乗ること、つまり「リトミック」が音楽教育の中で大切であると考ええる。リズム遊びやリトミックをおこなう方がよいと断定するのではなく、ピアノ指導における導入の方法として、これを取り入れることで音楽的素質を向上させ、子どもの成長に効果的であると考ええる。これは、エミール・ジャック＝ダルクローズの教育理念であると

言っても過言ではないだろう。

リトミックとは、エミール・ジャック＝ダルクローズ (Emile Jaques-Dalcroze) によって創始された、リズムによる感性の教育である（以下、エミール・ジャック＝ダルクローズを“ダルクローズ”と略名す）。ダルクローズの思想は、彼の著書『リズムと音楽と教育』の中で、「人間のからだは人間自身を表現する最大の表現物である」と述べ、「言語や文字による表現の根底には、このからだによる自己表現が重要である」¹⁵⁾と述べている。さらにリズムについての諸研究を重ね、人間の生理的な根源的要素は「リズム」によって支配されており、また音楽を含む芸術の基礎も「リズム」であり、この両者の統一から人間の自己表現としての芸術表現が最も豊かなものになる。そしてこの両者の統一のためには、人間の生理的な機能である筋肉組織及び神経組織を教育の対象と考え、それらの訓練を十分おこなうことによって、芸術による自己表現が可能である、ととらえているのである¹⁶⁾。つまりこれは、私たちが音楽を習う際に必要な基礎知識を、楽譜からではなく、全身の動きをはじめとする様々な訓練によって音楽の基礎を体験させるものである。3歳前後から小学生になる頃は、体の筋肉が大きく発達する時期でもあり、全身を使うリズムを主とした訓練は、様々な方法により子どもの音楽的素質の向上とリズムカルな性格の向上とを企てたものと言われている。子どもの生来もっている音楽的能力の根源である潜在的なリズム感覚を「リトミック」の方法によって音楽的能力として目覚めさせ、啓発し発展させるというのがダルクローズの考案である。このリトミックは、子どもの成長に大きな役割を果たすだろう。

リトミック・レッスンは、主にピアノの音により、リズムを感じ取って運動をおこない、手、腕、足などの部分的な動作だけではなく、からだ全体をリズムカルに動かすことにより、注意して聴く集中力や、音を判断してすぐに動く即応力、反射神経などを高めるとともに、無意識のうちに音感を育てていくものである。

音楽活動のなかで、リズム打ち、リズムの模倣、再生をおこなったが、幼児が習得可能であるリズム・パターンを用いるべきであると考え。それをもとにして、幼児のリズムの再生能力をよく考えた上で、リズム指導をおこなわなければならない。例えば、今回の音楽活動の中で、事例 A 児に対して、図 9 に示すリズム打ちをお



図 9-1 指導者がおこなったリズム打ち



図 9-2 A 児がおこなったリズム打ち

こなった。

図 9-1 は指導者がおこなったリズム打ち、図 9-2 は A 児がおこなったリズム打ちである。指導者の後に A 児が模倣するという方法である。この例から、付点リズムにおいては、幼児にとっては難しいものであり、認識しにくいようであるが、9月の時点で安定したリズム打ちができるようになった。幼児が日常生活の中、または遊びや好んで歌う歌の中でのリズムを取り上げ、また指導者が合わせやすいリズムのはっきりした曲を聴かせて、両者が合致するように誘導していくことが大切であると考え。そして、手拍子や楽器遊びなどをおこない、そこから徐々に高度なリズムを習得させていくとよいだろう。

(3) 聴く活動

音楽は言うまでもなく、耳から入るものである。音楽の著しい特性は音であり、音は耳を通してのみ知覚されるものであろう。したがって、聴くということは、あらゆる音楽経験には欠くことのできない要素であり、また音楽的成長のあらゆる面における基礎的要素である。また、いい音楽を聴き分けていく上での基礎であると言える。この観点から、音楽を聴くということは、ただ身体的な耳だけではなく、内なる心の耳が関係していると言える。またそうした耳をもってはじめて、音楽に能動的に関わっていくことができるようになる。

さらに身体全体の運動機能も活発になってくる。3歳ごろまでは、音楽の感受性は耳から入った音により生まれる。「音楽的にいい耳をもつ」とは、いい音楽に触れることにより培われる。音楽を鑑賞することで、その曲がもっている感じをとらえたり、そこから場面や情景を想像したり、また自由な身体の動きをしたりもする。身近な音や様々な曲を聴くことを通して、音・音色に対する感受性を養い、心の動く状態が生まれ、いろいろな音色に敏感になる。そして、音楽を聴こうという前向きな姿勢ができていくのである。

聴く活動において、内容のある親しみやすい曲を聴き、次第にいろいろな違った曲、違う楽器、違った演奏形態のものを聴くようにし、聴く力を伸ばすことが大切だと考える。

感覚の鋭いこの時期に、美しい音楽を多く聴くことは大切である。今回の音楽活動でも明らかになったことでもあるが、幼児は最初リズムカルな曲を好む。リズムカルな動きは、子どもたちを身体的、精神的に解きほぐす働きをもっている。楽しい時に歌を口ずさんだり、躍動的に手足を踊らせるのは、子どもだけではなく成人してからも同じである。これは将来、技能の巧拙に関わら

ず、果たしている人格形成的な役割があると言っていいだろう。鑑賞の際にも、身体の動きも見られることが多かったが、リズムカルな曲は、身体反応もあって聴くようにすればよいだろう。またリズムカルな曲とは対照的に、静かな曲も聴くことが大切で、対照的な曲を聴いてどのように感じたか、どのようなイメージを描いたか、などを子どもたちが話し合ったりすることで、自分の感じたことを具現化する。これが、心の中で曲のイメージを膨らますことにもなる。曲を聴いて自分の感じたことを発表したり、話し合ったりする中で、時には話し合いから脱線してしまい、音楽とは全く違う話題になってしまったこともあった。しかし、鑑賞の時には身体の動きが見られたように、子どもは自分の感じたまま体で表現していたのが印象的であった。オースティン作曲「人形の夢と目覚め」は、人形が眠りに入り、眠りの中で夢を見て、突然目覚めて踊り出す、という曲全体が物語となっている。分かりやすい表現で構成された曲である。この踊り出す部分の曲を聴いて、子どもたちは片足跳びをしたり、スキップをした。このような活動は、子どもの創造性をも養うことになる。

さまざまな音を聴くことは、大人が音に対して耳を傾けるように、子どもに聴くことを積極的に促すことが大切である。また、聴く活動の中で、単に音楽を鑑賞するというだけではなく、音楽を聴き、それとともに身体を動かし、遊び楽しむことが大切である。またピアノに限らず、さまざまな音を聴かせ、またいろいろな楽器の音に親しませることも必要である。子どもの身近にある楽器としては、鍵盤楽器、打楽器、笛などが挙げられる。これらの楽器は、鳴らし方によってさまざまな音が出る。活動の中でも、子どもたちはいろいろな鳴らし方を試して、音を探し出し楽しんでいった。

子どもたちのまわりには、音楽以外にもテレビの音など、限りなく多数の音に満ちている。それらの中から、美しいものを美しいと感じて聴くという感受性を育てるべく、子どもたちへ音楽的環境を与えることは、指導者の役目である。

(4) 弾く活動

最近では、鍵盤ハーモニカなどの鍵盤楽器（音階のあるもの）を用いている幼稚園が多くある。しかし、指先の骨や筋肉がまだ未発達にある幼児にとって、本当に楽しい活動となっているかどうかは疑問である。しかし、音の高低などの知覚を促すためには、鍵盤楽器を是非取り入れたい。その場合、幼児に自由に探り弾きをさせたり、幼児の知っている簡単なメロディーを聴かせてから弾かせるのがよいだろうと思われる。

打楽器でも、幼児の身体の成長に応じた、扱いやすい楽器が望ましい。しかし、いつも同じ楽器ではなく、今回の音楽活動でもおこなったが、自分で楽器を作ったり、普段幼児が触れることがないような珍しい楽器も取り入れることが望ましいと考える。いろいろな楽器に触れることにより、さまざまな音色を聴くことができる。そして、自分で楽器の鳴らし方を工夫することによって、さまざまな音色を作り、聴くことができ、音色に対しても敏感になるだろう。また、聴覚の発達をも促すだろう。打楽器を最初は自由にたたくことから始め、次第に曲に合わせて決まったリズムをたたいたりするようになり、これをリズム活動に用いて、合奏などにも展開できるだろう。音の高低や音色、拍子感なども養うことができると思う。

(5) 創る活動

子どもは、音の出るものを好む。スプーン、棒や箸、なべ、空き缶、空き箱など、およそ音の出るものは何でもたたいて、手の動作と同時にその出た音を聞いて楽しむものである。茶碗を箸でリズムカルにたたき、鉄格子を棒で順々にたたいていく、木箱を棒でたたいて太鼓の代わりとするなど、このような遊びから、楽器を使用する喜びを感じているだろう。

幼児にいろいろな素材でもって楽器を作らせてみてはどうだろうか。幼児には幼児に適した楽器があり、幼児らしい創作、そこから喜びが生まれてくるだろう。楽器もさることながら、創ることは創造性を養う上で大切な活動であろう。創ることによって、個々の経験が豊かになり、自身の考え方が培われていくものである。それでは、子どもの創造性を伸ばし養うには、どのような経験や環境が必要なのだろうか。

例えば、歌う活動について言えば、知っている曲に自由に言葉（歌詞）をつけて歌うことによって、表現力を養うことができる。今回おこなった音楽活動の中でも、S児は「CAT AT NIGHT」の歌の歌詞「ねこちゃんおそとであるいてる、ぬきあしさしあしあるいてる」（この歌詞は英語詞であるが、日本語詞にしたものである）の中の「あるいてる」を「あそんでる」に変えて歌った。その後、他の歌の歌詞も変えて歌っていた。ねこが遊んでいるイメージと、語呂合わせがS児にとって楽しかったのだろう。

また打楽器を弾く活動の中で、音楽に合わせて自由にリズムを打ち、模倣を通してリズムパターンを発見し、自分なりに工夫ができ、まわりの子どもたちと合わせる場面も見られた。打楽器を使う際、初めから使い方、打ち方を指導するのではなく、自分自身で音の鳴らし方を

発見させていくことにより、工夫した音を創ることができるだろう。1つの打楽器に対して「他にはどんなたたき方があるかな？きれいな音が出るかな？」と言えば、棒でこすったり、他の面をたたいたりして、音の出し方に工夫が見られた。

その他にも、子どもが家庭での生活の中で触れるものを使って、楽器を作ってきたりもした。今回の音楽活動で、K児はヨーグルトの空きカップ2つに植物の種を何粒か入れて、シェイカーのようなものを作ってきた。S児は小さなシェイカーを2つ作り、それに棒をつけて、マラカスのようなものを作ってきた。このように、生活の身近なものを使って楽器、音の出るものを作ることで、子どもの音に対する興味を引き出すことができ、楽器に対する興味がより一層増すであろう。

幼児の音楽活動を5項目に分け、その活動における環境や援助方法を述べてきたが、これらの5項目がどれか1つに偏ることなく、常に包括的におこなわれることが望ましいと考える。これらの活動を通して、幼児が自己表現し、少しでも創造性を養っていくことができればと筆者は願っている。音楽教育の最大の目標は、音楽的成長を促し、創造性をもった人間に育てることにあると考える。音楽の諸要素を感じ取ることであり、そのためには楽しいだけの放任ではなく、音楽を通して情緒的なものに触れ、音楽の構成要素を知覚していくように促し、幼児が楽しく気持ちを充実させて活動できるように、指導者のアプローチが必要である。

V おわりに

本稿では、導入期のピアノ指導について、子どもの心身の成長・発達を考え、さらにはその音楽的成長のための環境づくりについて考察を試みた。

まず、音楽的能力とはどのようなものを指すのか、その概念について、またその類似したものの概念について考察した。マーセルの述べる音楽的成長の概要から、音楽的能力の概念は多様であることが把握でき、さらに音楽的能力が何により規定されているのかを明らかにした。

方法として、A市A幼稚園の3人の園児に対して、半年間にわたる音楽活動の経過から分析・把握を試みた。音楽活動の経過は随時記録したが、ここでは各幼児の特に目立った（進歩が見られた）活動について、その特徴を探った。その結果、指導を受けた3人の幼児は、音色やリズムを識別する能力が顕著に伸びた。これは音楽活動の指導によって、音に対する感受性が敏感になり、聴覚の発達を促したからだろう。なお、この研究

の中でおこなった音楽活動の内容及び指導は充分ではなく、また調査も短期間であったため、正確な結果を出し分析をおこなうことができなかったが、幼児の能力に沿った、ピアノを中心とする基礎的な音楽活動をおこなうことはできたと思われる。

またこの調査では、基本的にグループで音楽活動をおこなったが、これは個人の音楽活動とどのような違いがあるのか、どのような効果があるのかも考察を試みた。グループでの音楽活動は、なるべく能力差を少なくすることを心掛け、それに沿って個々の能力を把握することが大切である。子どもたちの関係が円滑になるように配慮も必要になってくる。

この調査をもとに、導入期のピアノ指導方法について考察をおこなった。子どもの音楽的能力を把握した上で、子どもの成長・発達に即した適切な教材を活用すべきである。この研究ではバステイン教則本のほんの一部に触れ、特色および問題点を探るのにとどまったが、今後のピアノ指導にも、教材選択は重要である。

ピアノを習い始める年齢は、最近では早い傾向にあり、3歳から始めているとも聞く。これはピアノの技術習得のために、少しでも早い時期から始めようとしているようである。これでは幼児期から無意識なメカニック先行の訓練を受けるため、結局子ども自身は音楽を楽しむことがなく、かえって拒否反応を示すことも少なくなる。幼児期は生理的にまだ未発達であるため、無理のある訓練は避けるべきである。まず子どもが音楽を楽しむことができるような音楽環境を作って指導しなければならぬと考える。今回の音楽活動のように、ピアノを中心としたさまざまな活動を取り入れ、総合的な指導によって、音楽的感性の発達に繋がるのであろう。

なお本論文においては、筆者の今回の音楽活動を通じた指導法の一考察の記載のみにとどめたが、今後の子どもとの関わりから新しい、なおかつ子どもが心から音楽を楽しむことができるようなピアノ指導を試行錯誤しながらおこなっていきたい。このような音楽活動を持続させていくとともに、今後のピアノ指導をさらに発展させたいものである。

注

1) 現在ではTV、DVD、CD、YouTubeが該当するであろう。

文献

- 1) J. L. マーセル『音楽的成長のための教育』（美田節子訳）。音楽の友社。1971. p.10.
- 2) 前掲書1) p.12.
- 3) 前掲書1) p.13.

- 4) 前掲書 1) p.14.
- 5) 前掲書 1) p.15.
- 6) 前掲書 1) pp.17-18.
- 7) 前掲書 1) p.18.
- 8) 高田俊治『レッスンの形態とグループ・レッスンの効用』(『ピアノ講座』第4巻), 音楽の友社, 1981. p.215.
- 9) 前掲書 p.215.
- 10) 斉藤繁 幼稚園教諭・保育養成課程用『幼児の音楽教育』音楽教育研究会, 1997. p.26.
- 11) コダーイ・ゾルターン『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践』(中川弘一郎編訳), 音楽の友社, 1980.
- 12) 山下俊郎『幼児心理学』朝倉書店, 1955.
- 13) 木村美江『バステイン・ピアノ・ライブラリー, ミュー
ジック・スルー・ザ・ピアノ』(『ピアノ講座』第2巻),
音楽の友社, 1981. pp.144-151.
- 14) エミール・ジャック＝ダルクローズ『リトミック・芸術と
教育』(板野平訳), 全音楽譜出版社, 1986. pp.41-52.
- 15) エミール・ジャック＝ダルクローズ『リズムと音楽と教育』
(板野平訳), 全音楽譜出版社, 1975.
- 16) 浅香淳(編)『音楽教育の歴史』(『小学校音楽講座』第2
巻) 音楽の友社, 1982. p.171.

付記

本論文に関して、開示すべき利益相反事項はない。